

## 維摩と文殊

—河鍋暁斎筆「大和美人図屏風」に込められた寓意—

曾田 めぐみ 日本学術振興会／東京大学

絢爛たる遊里の室内と艶やかな美人を描いた「大和美人図屏風」(河鍋暁斎筆、二曲一隻、明治17-18年〔1884-85〕、個人蔵)は、暁斎(1831-89)に弟子入りし「暁英」の画号を授かった英国人建築家ジョサイア・コンドル(1852-1920)のために制作された作品である。コンドルは本作の右扇が完成するまでの制作手順および手法について、自著 *Paintings and Studies by Kawanabe Kyosai* (『河鍋暁斎 本画と画稿』1911年)に綿密な記録を豊富な図版を添えて残している。

先学の研究によって、「大和美人図屏風」は制作年代や制作目的、その技法と伝来までが明らかにされてきた。しかしながら、その画題については未だ解明されていない点が多い。本発表では描かれたモチーフを読み解きながら画題を明らかにし、本作の主題が暁斎とコンドルの師弟関係を象徴するものと考察する。

まず注目したいのは左扇の美人と禿である。かつて松原茂氏が指摘されたように、左扇の美人が手にする払子から、ここに描かれた人物は何者かに見立てられたものと考えられる。背後の禿が蓮の華を持っていることからして、払子を持ち文殊菩薩と問答をする維摩と散華する天女を彷彿とさせる。李公麟の筆として日本に伝わった「維摩居士図」(南宋時代〔13世紀〕、京都国立博物館)には散華する天女と払子を持つ維摩が描かれているが、暁斎は同図の模本を所持していたことが知られている。また、暁斎が「大和美人図屏風」を描き始める前年の明治16年(1883)に手掛けた下絵「維摩と鏡見る美人」(河鍋暁斎記念美術館)には、本作と類似する調度品が描かれている点も興味深い。加えて左扇の美人は、その前髪を残した髪型と鷹の羽が散りばめられた着物から女性ではなく若衆と推測され、この点も併せて考察したい。

一方、右扇の美人の背後には牡丹の花がひときわ大きく描かれており、「唐獅子牡丹」から転じて獅子を乗り物とする文殊菩薩を思わせる。文殊菩薩としての美人は唇を閉じ、維摩居士としての美人は口を開いている点も、「維摩と文殊の問答」として読み解く一つの傍証になると考える。では、画中画の四季耕作図屏風についてはどう考えるべきであろう。『維摩経』において、衆生が悟りに至る過程として文殊菩薩が「糞土の地に種を蒔く」という例え話をする。土中に蒔いた種が悟りの象徴である蓮華へと実を結ぶ様は、種蒔きから収穫までを描いた「四季耕作図」に擬えられているのではないだろうか。

「大和美人図屏風」が「維摩と文殊の問答」を主題とした作品だとするならば、なぜ暁斎は弟子のコンドルに本作を贈ったのであろう。暁斎は右扇を制作するにあたり、はじめから最後までコンドルの目の前で描き、コンドルはその一部始終を周到に書き残した。持てる限りの画力を駆使して描き上げた「大和美人図屏風」は、維摩と文殊すなわち師暁斎から弟子コンドルへの教を象徴し、互いの師弟関係が凝縮された作品として読み解けるものと考えられる。

(そだ・めぐみ)